

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：17702

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K10818

研究課題名(和文) 中学校における武道が日本の伝統文化の継承に果たす教育的機能

研究課題名(英文) The Educational Function of Martial Arts in Junior High Schools for the Inheritance of Traditional Japanese Culture

研究代表者

北村 尚浩 (Kitamura, Takahiro)

鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・教授

研究者番号：70274868

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：指導する側の教員は、武道の授業を通して「他者を尊重する態度や礼儀、礼法中心の指導」や「立ち居振る舞いや所作」「感謝の気持ち」の指導に留意している。それに対して学習者である生徒は、武道の中で重要視される礼儀作法や精神修養のような日本の伝統的な価値観や行動様式、生活様式を伝統文化として学習していることが明らかになった。生徒は武道それ自体や姿勢、立ち居振る舞いを日本の伝統文化として認識されている。

また、海外の武道実施者は、武道をスポーツの一種目として捉えており、学習成果としても力や運動技能の習得などが多く挙げられたのと比較して、他者への敬意や日本の伝統文化の理解などは少ないことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2012年4月に、日本の伝統文化の継承を目的として中学校の体育で武道が必修化された。体育の授業の中ではスポーツの一つとして扱われるが、その教育には日本の伝統文化の継承という、他の種目にはみられない特異性を有している。武道は伝統文化の継承・発展のための教材として教員の間でも一定の評価が得られており、そのためのツールとしての期待感が強い(北村, 2013)。

しかしながら、武道が必修化されて10年が経過する中で、日本の伝統文化として何を教えるべきかは、必ずしも明確になっていない。本研究は、教育政策の成果を評価するものであり、政策評価の観点からもその意義を有するものである。

研究成果の概要(英文)：The teachers are concerned with teaching "respect for others, courtesy, and etiquette", "behavior and manners", and "gratitude" through the martial arts classes. In contrast, the students are learning traditional Japanese values, behaviors, and lifestyles, such as etiquette and spiritual cultivation, which are important in budo, as part of traditional culture. The students perceive budo itself, posture, and behavior as part of traditional Japanese culture. The study also revealed that martial arts practitioners in other countries regarded martial arts as a sport, and that the learning outcomes were less about respect for others and understanding of traditional Japanese culture, compared to the learning outcomes such as strength and motor skills.

研究分野：体育・スポーツ社会学

キーワード：武道 伝統文化 中学校 体育

1. 研究開始当初の背景

武道の学習を通じて我が国固有の伝統と文化により一層触れることができるようにする(文部科学省, 2008)ため, 2012年度より中学校の体育における武道が必修化された。

申請者らはその教育的効果を検証し, 日本の伝統文化的側面の教育効果は, 教員では強く認識されている(Kitamuraetal., 2016)一方, 生徒では弱い(Kitamuraetal., 2017; 北村ら, 2017)ことを明らかにし, 両者の間にはギャップがあることを報告している。

また, 欧州の10代の柔道実施者と日本の中学生柔道実施者とを比較したところ, 欧州の実施者は日本の実施者に比べて運動そのものに対する関心が高く, 日本の伝統文化的側面よりもスポーツの一種目として志向していることが示唆された。

このような背景のもと, 中学校の体育における武道教育について, その教育内容と教育効果との関連を明らかにすることで, 伝統文化の習得のための武道教育の在り方について有意義な示唆が得られると考え, 本研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究の目的は, 中学校で必修化された武道教育が, 日本の伝統文化の継承に果たす機能を明らかにしようとするものである。

3. 研究の方法

(1) 平成30年度

全国の中学校を対象として, 体育の授業における武道の実施状況と教育内容, その効果について質問紙調査により明らかにすることが目的であった。とりわけ, 学習指導要領により示された指導内容をどの程度指導し, 生徒たちがどの程度習得できているのか, そして, 武道の授業を通して「我が国固有の伝統と文化への理解を深める」ことを留意した指導内容, その他の種目と比較して生徒への学習効果の違いを明らかにすることを試みた。そのため, 全国の分校を除く公立中学校から1,002校を無作為に抽出して2018年11月から2019年2月にかけて郵送法による質問紙調査を行った。

(2) 令和元年度

協力の得られた中学校の生徒を対象として, 体育の授業における武道の学習成果について質問紙調査により明らかにすることが目的であった。とりわけ, 学習指導要領により示された指導内容を生徒たちがどの程度習得できているのか, そして, 「武道の授業を通して学習した日本の伝統や文化」にはどのようなことがあったのかを明らかにすることを試みた。そのため, 2018年度に教員を対象に実施した質問紙調査の際に生徒への調査の内諾が得られた108の中学校に対して改めて協力を依頼し, 30校の生徒1,909人に対して2019年11月から2020年3月にかけて質問紙調査を行った。

(3) 令和2年度, 令和3年度

海外の武道参加者の参加動機と彼らが抱く学習効果を調査し, 得られたデータを日本の武道参加者と比較することで, 武道のグローバル化・スポーツ化の視点から, その効果を検証することが目的であった。しかしながら, COVID-19の世界的流行により海外での調査実施が遅れたため, 計画全体に遅れが生じた。海外の武道参加者の参加動機と武道実施による学習効果を明らかにするため, オランダ・ベルギーの柔道家を対象として2020年12月8日から2020年12月

28 日にかけて Microsoft Forms を用いたインターネット調査を行った。

そして、2018 年度から 2020 年度にかけて実施した中学校の教員、中学生、海外の武道参加者をそれぞれ対象とした一連のアンケート調査から得られたデータを、日本と海外のデータを比較して武道のグローバル化・スポーツ化の視点から、その教育効果を検証した。

4. 研究成果

(1) 平成30年度

武道の実施状況として、実施している種目は柔道(62%)、剣道(34%)、その他(4%)の順で、従来報告されている割合とほぼ同様であった。指導内容では、「技の名称や行い方」「基本となる技」や「健康・安全に配慮する」「健康・安全を確保する」など、安全に十分配慮しつつ基本的な技術指導に重点が置かれている様子が窺えた。一方で習得状況では、「習得できている」との回答が半数を超えたのは「健康・安全に配慮する」「健康・安全を確保する」の2項目のみであった。そして、「我が国固有の伝統と文化への理解を深める」ことを留意した指導内容についての自由回答を分析した結果からは、伝統や文化を教員がどのように捉えているのかが浮き彫りになった(図1, 図2)。図1では、「我が国固有の伝統と文化への理解を深める」ことを留意した指導内容の記述の中で用いられた、「相手」「指導」「礼法」「尊重」などの語で構成されるサブグループが最も大きく、また、多次元尺度構成法による抽出語の2次元プロット(図2)からは、授業において、礼法指導や他者を尊重する態度を中心に教える、というクラスターを、「礼儀作法や立ち居振る舞い」「日本の伝統や歴史の学習」「行動の成り立ち、文化的背景」「伝統的な考えに触れる」「授業への取組」「感謝の気持ち、意識」「態度」などのクラスターが取り巻いている様子が窺える。

これらの結果から、教員は「他者を尊重する態度や礼儀、礼法中心の指導」や「立ち居振る舞いや所作」「感謝の気持ち」に留意した指導を行っていることが明らかになり、これらに教員が考える日本の伝統文化が表出していることが示唆された。

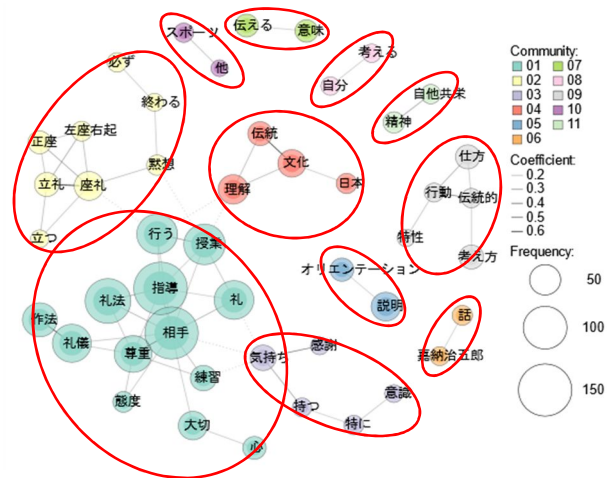


図1 指導内容の共起ネットワーク

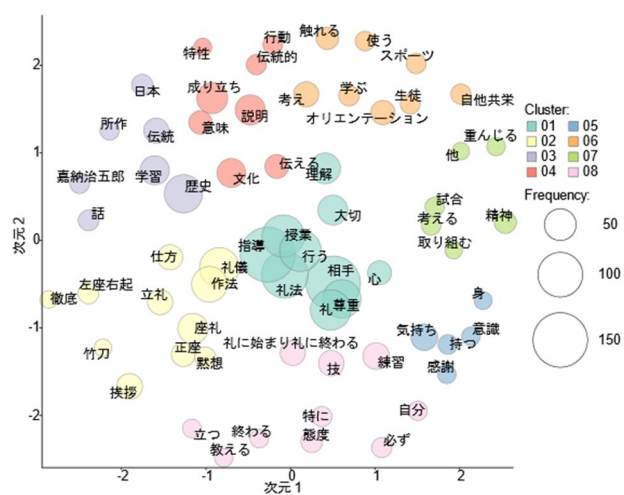


図2 多次元尺度構成法による配置

(2) 令和元年度

体育の授業における武道の学習成果について、質問紙調査により明らかにすることが目的であった。とりわけ、学習指導要領により示された指導内容を生徒たちがどの程度習得できているのか、そして、「武道の授業を通して学習した日本の伝統や文化」にはどのようなことがあった

(4) 期間全体を通してのまとめ

全体を通して、教員は武道の授業を通して「他者を尊重する態度や礼儀、礼法中心の指導」や「立ち居振る舞いや所作」「感謝の気持ち」の指導に留意している。それに対して生徒は、武道の中で重要視される礼儀作法や精神修養のような日本の伝統的な価値観や行動様式、生活様式を伝統文化として学習していることが明らかになった。生徒は武道それ自体を日本の伝統文化の一つとして捉えており、その姿勢や立ち居振る舞いは日本の伝統文化として認識されている。しかしながら、学習した内容が現代を生きる子どもたちに定着しているとは言い難く、日本人としてのアイデンティティ形成への影響について今後の検証が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 北村尚浩, 中村勇, 前阪茂樹
2. 発表標題 海外柔道家の柔道参加動機と学習効果：オランダ・ベルギーの柔道家を対象として
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会第72回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Takahiro Kitamura, Shigeki Maesaka, Isamu Nakamura
2. 発表標題 What do students learn of Japanese culture through budo in physical education class
3. 学会等名 European Association for Sociology of Sports 2021 Congress (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 北村尚浩, 中村勇
2. 発表標題 武道の授業で日本の伝統文化をどう教えるのか：教員の自由記述データの計量的分析
3. 学会等名 日本体育学会第70回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takahiro Kitamura
2. 発表標題 The impact of budo education on Japanese tradition and its difference to other sports in junior high school
3. 学会等名 16th European Association for the Sociology of Sport Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	前阪 茂樹 (Maesaka Shigeki) (10209364)	鹿屋体育大学・スポーツ・武道実践科学系・教授 (17702)	
研究 分担者	中村 勇 (Nakamura Isamu) (70315448)	鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・講師 (17702)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------